2018年9月30日

　　　　　　実行委員長挨拶、教駒・筑駒ハンドボール部の歴史について

　創部５０周年記念祝賀会実行委員長の２０期の岩田です。

　我が「教駒・筑駒ハンドボール部」もこの秋創部５０年を迎え、本日この多くの皆様のご出席の下、記念祝賀会を開催する運びとなりました。

　まずは、開催の準備をしてくださった幹事長の２７期用丸さんをはじめとする幹事団の皆様並びに顧問の鈴木先生に深く感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

　野球やサッカーのようなメジャースポーツでもないハンドボールを、部員のいない期や少ない期もありますが、５０年もの間継続して途切れることなく部活動としてやってこられたことを（バレー部のように関東大会に出場したことがありながら継続できなかった部もあります）、係ってこられた部員、ＯＢ、顧問の先生方などの関係者の皆様に深く感謝したいと思います。

　次に今までにお亡くなりになられた方、（２０期）中山裕樹さん、岸井大太郎さん、（２７期）高市康博さん、（３０期）鈴木啓さん、（他におられたらごめんなさい）にこの場をお借りして深い哀悼の意を表したいと思います。特に中山さんは、後で出てきます大内杯、教駒クラブ設立の功労者であり、彼なくして今のＯＢの活動はありません。なお、鈴木さんは在校中にお亡くなりになっております。

　では、創部５０周年にあたり、私の手元にある記録と記憶から、教駒・筑駒ハンドボール部の歴史について少々語らせていただきます。

　まず、創部ですが、高校のハンドボール部は、1968年に当時高校に上がったばかりの１９期１０名ほどで同好会として創設され、その年の秋に部に昇格しており、今年（2018年）創部５０周年を迎え、本日の祝賀会に至っております。中学は、遅れること2年、２２期生が、やはり同好会として創設（1970年）し、部に昇格（1972年・２４期生）（なお、前年度は生徒会で否決）して、現在に至っています。創設した１９期の皆さんによれば、運動部の持っている封建的な古い体質の改善や自発性を尊重した民主的なクラブを作りたいという思いがあったようです。そして、大内勝夫先生に顧問をお願いしたところ、「関東大会を目指すくらいのつもりでやるのでなければ引き受けられない。」と言われて、甘い考えを正されたと聞いています。

　我々２０期は中学３年の秋、部昇格とともに入部し、人数も多く結構強かった（東京都ベスト１６）のですが、２１期、２２期は人数が少なく存続の危機になりました（２２期の高橋君、大津君が２１期より先に入部し繋いでくれました）。幸い２３期が一学年でチームを組める人数となり、また、近藤史彦君はＯＢになってからコーチを務めてくれ、これ以降若いＯＢがコーチを務める伝統もでき、部の基盤も整いました。

　残念なことに４０期、４６期、５６期と３年ほど部員のいない期や人数の少ない期もありますが、５０年も継続して今に至っており、現在では一番人気のスポーツクラブだそうです。

　古いＯＢの時代は、本校全体として高校２年生の秋の新人戦で引退というのが普通だったのですが、はっきりとはわかりませんが、４２期ぐらいから高校３年生の夏の全国予選まで現役を続けるようになって今に至っています。もっとも、それまでも２０期、３３期、３４期等、いくつかの期で全員あるいは一部の人が３年生まで続けています。

　戦績としては、東京都ベスト８が最高で、２７期（新人戦）、３０期（新人戦）、４１・４２期（新人戦、全国予選）、４４期（新人戦）の５回、ベスト１６は２０期（新人戦）、３３・３４期（全国予選）、３４・３５期（関東予選）、４１・４２期（関東予選）、４２期（新人戦）、５８期（新人戦）の６回、ベスト２４は２０期（関東予選）、３３・３４期（関東予選）の２回あります。最近の現役は、大内杯で見ていますと、昔よりもずっと強いと思うのですが、他校のレベルが上がっているのか戦績は上がりません（ベスト３２：６３期（新人戦、関東予選）、６５期（全国予選））。いつの日か夢の関東大会、インターハイの出場を期待しております。また、３０期の瀬川君は東京都選抜に選出され、国際試合の前座として東京都高校生東西対抗戦に先発出場しています。

　中学の戦績としては、東京都ベスト４の３４期（正確には区部ベスト４）、ベスト８の５５期（春）、７０期（秋）（春・区部）（夏）、ベスト１６の５３期（夏）、５８期（秋）、６１期（夏）、６６期（秋）、世田谷区優勝の４８期があります。

　また、変わったエピソードとしては、文化祭で１９期と２０期が「嗚呼 !! 涙のハンドボール」という部誌を発行、２３期は「ワイルド７」というフォトストーリーを上映、２６期は招待試合で日本体育大学女子と対戦といった話が伝わっています。

　主顧問の先生は、初代大内勝夫先生が1974年に天理大学に転出された後、小澤正晴先生、坂根義久先生が引き継がれ、1980年から1994年まではＯＢ（２０期）の佐藤和孝先生が、1995年以降は鈴木清夫先生が面倒をみてくださっています。

　次にＯＢの活動ですが、現在きちんとした組織のＯＢ会はなく、会長もいなければ、会費も会則もありませんが、２０期が1972年の卒業時に創設以降、卒業後間もない若い期が幹事となって、年に２回、春と秋に「大内杯」という名称のＯＢ戦を行っています。大内杯は、ＯＢのハンドボールを忘れないためということを含めた親睦と現役の強化を目的に創設されたものですが、実は体育館でプレーしたいという願望が強くあり、そのために卒業生というパワーを使えば勝ち取れるという打算もあって、１９期の卒業式の日に、式の後、卒業記念試合を体育館で行ったことが前身です。そんなわけで、最初のうちは全て体育館で実施していたのですが、残念なことに、体育館が傷むからとの某先生からの強いご指摘により1980年の第15回大会からグランドで実施、雨天時のみ体育館ということになっています。大内杯のカップについては、創設時に大内先生から寄付していただいておりましたが、第23回大会時に創部１５周年を記念して新調し、今に至っております。さて、この大内杯も本日（2018年秋）で丸47年、90回を数え（1974年、1975年、1986年、1992年は １回/年 開催）、ＯＢの延べ出席者数は2,000名を超えています。このままいきますと、５年後には100回大会となります。大内杯の記録については、後程もう少し詳しく述べさせていただきます。

　また、1973年に教駒クラブというＯＢクラブチームを立ち上げ、翌1974年から1993年頃まで約２０年間東京都クラブリーグに参戦（最高で２部、最後は４部）していました。今はＯＢクラブではなく地域クラブとして受け継がれているようです。

　本日創部５０周年記念祝賀会を開催しておりますが、過去にも周年記念は行われておりまして、1978年秋に２４期を幹事に創部１０周年記念祝賀会開催（渋谷・一番別館）（第12回大内杯大会後）、１０周年記念誌（編集代表：山本尚彦さん）発行、1984年春に３０期を幹事に創部１５周年記念祝賀会開催（新宿・MY CITY）（第23回大内杯大会後）、1988年秋に３５期を幹事に創部２０周年記念祝賀会開催（渋谷・東武ホテル）（第31回大内杯大会後）、また、創部３５年にあたる2003年秋には５１期を幹事に60回記念大会と祝賀会（駒場エミナース）（１９期～５４期、４４名出席）が行われました。

　それでは、大内杯の記録について、述べさせていただきます。

　本データは、2009年４月時点に私（岩田）の手元にあるＯＢ会報（たぶん発行された全て）と幹事の手元にあったノート（第24回～第39回、第40回～第51回、第56回～）で70回までを、それ以降は大会ごとに幹事のノートから集計したものになっています。なお、本日が90回大会になっていますが、このうち３回は中止で実質87回、記録としては前回大会までの集計ですので86回分になります。通算得点記録は、第19回大会（1982年春）のＯＢ会報に全員の記載があり（最初）、これをベースにしています。最初に通算得点記録を集計したのは1979年頃と思われますが（誰かは不明）、この時既に第１回、第２回大会の個人記録は失われており加算されていません。従って、２３期以前の方はその分少なくなっています。また、２０期以前は現役の時に大内杯が創設されていませんでしたので、その分のハンディもあります。また、一部記録がなく推定になっている部分があります。

　まずチーム編成ですが、初年度の1972年の第１回、第２回大会は現役、１９期、２０期の３チームのリーグ戦、翌1973年春の第３回大会は２１・２２期チームが加わって４チームのトーナメント戦、そしてなんとその年の秋の第４回大会は中３、中学現役を加えた６チームによるトーナメント戦が行われています。この時は試合開始時に中学生全員で７ｍスローを投げて入った分の得点がつくというハンディをつけていましたが、組み合わせにも恵まれた２５期の中３チームが決勝進出を果たし準優勝しています。以降は、中学生チームを作ることはなく、いくつかの期の合同チーム、1988年秋の31回大会から古い期の順に長老、中堅、若手という形で３チームを作り、トーナメント戦を行うのが標準となりましたが（たまに人数が少ないと３チームによるリーグ戦）、参加者が少なくなってきた1998年秋の第50回大会から３チームのリーグ戦が標準になり、最近はＯＢの参加がさらに減ってオールＯＢで現役と２、３試合を行う形になっています。

　チームの試合記録が残っている82回中、現役が優勝したのは14回とＯＢ優位で、年長のチーム（年長といっても大学卒業間もない年代が主力のことが多いようですが）の優勝が24回、若手18回、中堅16回、オールＯＢ等その他が10回となっています。

　次に個人記録ですが、まずＯＢ通算出場回数（高校３年生以上をカウントしています）（記録があるのは81回分）は１位が２０期の佐藤さんの62回、２位は同じく２０期の私（岩田）の61回、３位は２６期の斎藤圭介さんの40回です。

　通算得点は、１位が２６期の斎藤圭介さんの440点、２位は３３期の浜野さんの330点、３位が２６期の斎藤健さんの300点でここまでが300点以上、200点以上は５人で、これに３０期の瀬川さん、３６期の成田さん、150点以上は11人で３５期の福原さん、３２期の長田さん、５５期の滝口さん、５８期の高田さん、４１期の山中さん、２０期の私（岩田さん）となり、100点以上になるとこれまで２３人の方が達成しており、記念のメダルが授与されています。

　個人賞としては第３回から得点王と最優秀選手賞が、第６回からベスト７が制定されており、記録の見つからない大会もありますが、得点王は２６期の斎藤健さんの９回、２６期の斎藤圭介さんと３３期の浜野さんの８回、５５期の滝口さんの６回、最優秀選手賞は２６期の３３期の浜野さんの１１回、斎藤圭介さんの８回、２６期の斎藤健さんの５回、ベスト７は２６期の斎藤圭介さんの３０回、３３期の浜野さんの２０回、３０期瀬川さんの１９回、２６期の斎藤健さんと３６期成田さんの１８回といったところです。ゴールキーパーでみてみますと、ベスト７で５８期大畑さんの８回、２６期杉本さん、３３期中野さん、３８期大塚さん、４８期鎌倉さんの６回、得点では５８期大畑さんの７点、２５期田中さんの６点、３８期大塚さんの４点といったところです。

　最年長得点記録ですが、第３回の大内先生の３７歳での記録をスタートとしていますが、ご自身で１６回大会に４４歳で更新された後、今年の春までに全部で２３回更新され、現在は２０期の私（岩田）の６４歳２ヶ月となっています。ちなみに岩田さんは２３回中１８回更新しています。これに続くのが２０期佐藤さんの５６歳１０ヶ月で４回の更新、他の方の更新履歴はありません。４５歳以上のシニアの得点としては、６０歳以上は２０期の私（岩田）だけで７点、５０歳以上は先ほどの２０期佐藤さんの１点、２６期の斎藤圭介さんの５５歳１ヶ月他１５点、３３期の浜野さんの５１歳０ヶ月他１３点、４５歳以上で３６期の成田さんの４５歳６ヶ月他５点、３８期森田さんの４５歳での１点があります。

　期別でみますと、延べ参加人数で１００人を超えているのが、２０期の197人、４８期の129人、２６期の120人、２３期の105人の４つの期となっています。通算得点は、１位が２６期で862点、２位が４８期で620点、３位が５５期で473点、４位が２０期で465点、５位が３３期で463点、450点以上はここまでです。

　大内杯も最近はＯＢの参加人数が減ってきております。通算記録は積み重ねですし、シニアの記録は継続です。若い方たちも、年のいってしまった方たちも、健康に留意して、是非大内杯に参加され、これらの記録を塗り替えていかれることを願ってやみません。

　長くなりましたが、このあたりで終わりとしたいと思います。